

## 医学書の乳海攪拌神話

瀧川郁久\*<sup>1</sup>

## The Churning of the Ocean as Quoted in Medical Books

Ikuhisa TAKIGAWA

## Abstract

The Churning of the Ocean (*samudramanthana*) is one of the most popular episodes in classical Indian myth. The story also appears in Tibetan medical paintings as an illustration of the origin of the poison. The Tibetan version contains some unique episodes and somewhat differs from the epic-purāṇa versions; moreover, some parallel passages of these episodes can be found in Indian medical books. By comparing these versions, we will be able to find another tradition of the story, different from the tradition of the well-known epic-purāṇa versions.

## 1. 乳海攪拌神話と医学タンカ

古代インドの海にまつわる神話のうちで、もっともよく知られたもののひとつに「乳海攪拌」のエピソードがある。この物語は『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』の二大叙事詩をはじめとして、諸プラーナ文献に繰り返し現われ、創世神話、あるいは世界の破壊と再生の神話として、研究者に重んじられている<sup>1</sup>。また、アンコールワットの回廊浮彫など、このエピソードを描いた絵画や彫刻もインド内外に数多く残されている。

乳海攪拌神話は、二大叙事詩と諸プラーナの記述に基づいて論じられるのが通例であるが、本稿では、言及・紹介されることの少ないチベットの医学タンカに描かれた乳海攪拌神話を取り上げる。

チベットの伝統医学は、仏教とともに伝わったインドの伝統医学アーユルヴェーダの流れをくむもので、その学説は『四部医典』(*rgyud bzhi*)と呼ばれる医書にまとめられている。この書に基づいて、チベット医学の理論と実践を図解したものが、本稿で取り上げる四部医典タンカである<sup>2</sup>。

四部医典タンカの一幅に、毒物の起源の図説がある。画面下半分に描かれた毒物の分類や治療法などの説明は『四部医典』の記述に基づくが、上半分に描かれている毒物の

起源の図解は、インドの乳海攪拌神話によっている。ただしその図解には、よく知られた二大叙事詩と諸プラーナの伝承とはやや異なる内容が含まれている。インド文献中にこれと対応する記述を求めたところ、いくつかの対応を医学文献中に見出すことができた。本稿では、このタンカのキャプションの記述から、叙事詩とプラーナの伝承とは異なる、もうひとつの乳海攪拌の伝承の一端を明らかにしたい。

## 2. 乳海攪拌神話の概要

まず、二大叙事詩と諸プラーナの伝承(以下、EP)によって、乳海攪拌神話のあらすじを確認しておく<sup>3</sup>。

## 海の攪拌

太古、神々は不死の霊薬アムリタを手に入れるため、アスラと協力して海を攪拌した。マンダラ山を攪拌棒とし、それに大蛇を巻きつけて攪拌用の綱とした。亀がマンダラ山を背中に載せて支えた。

## 猛毒の発生

海を攪拌すると恐ろしい猛毒(*kālakūṭa* あるいは *hālāhala*)が発生し、世界が滅びそうになる。シヴァ神はこの猛毒を飲み干して世界を危機から救ったが、毒のため

2009年11月30日受付 2010年2月25日受理

\*1 東海大学清水教養教育センター (The General Education Center, Shimizu, The School of Marine Science and Technology, Tokai University)

に喉を焼かれて「青黒い喉をもつもの」(Nilakanṭha) となった<sup>4</sup>。

### 宝物の出現

つづいて、攪拌によって乳状になった海から種々の宝物が出現する。太陽、月、家畜、宝石、女神、如意樹などがつぎつぎに出現し、壺一杯のアムリタをもった医神ダンヴァンタリが現われる。

### アムリタの争奪

アスラがアムリタを奪い去るが、ヴィシュヌは女性の姿でアスラを欺いてアムリタを神々に取り戻す。アスラであるラーフが神々にまぎれてアムリタを飲もうとしているのを、太陽と月が告発し、ヴィシュヌはチャクラを投げてラーフの頭を切り落とす。頭だけが不死となったラーフは、太陽と月を恨んで時折呑み込む(日蝕・月蝕の起源)。アムリタは神々の所有に帰する。

## 3. 四部医典タンカの「毒の起源」

以下に、「毒物の起源」の図から、画面中央より上の乳海攪拌神話を描いた場面のキャプションを訳出する(個々の毒物の説明に関するものは省く)。訳出にあたって管見し得た資料(末尾の文献リスト参照)のうち、A本(第53図)とC本(第51図)のテキストを底本とし、それぞれの通し番号を[ ]で示した(ただし、話の流れに沿うように順序を入れ替えてある)。異読がある場合は、採用しなかった方の読みを\*でテキストの後に付した。

### 3.1. 海の攪拌

rgya mtsho ri rab kyis srub shing la srub thag byas pas bkru shas pa [A 欠, C10]

メール山を攪拌棒にして、[蛇の] 綱をかけて、海を攪拌する。

tshangs pas ri rab gi steng nas mnan pa. [A1, C6]

ブラフマーは、メール山の頂から抑えつけた。

lha dbang phyug gis rus sbal la rgyab gtad sbrul thag 'then pa. [A2, C9]

イーシュヴァラ神は、亀の背に乗って、蛇の綱を引いた。

lha min gyi gnas. [A3, C4]

アスラの住処。

lha min gyis sbrul thag 'then pa. [A8, C8]

アスラが蛇の綱を引っぱった。

### 考察

攪拌棒に用いられる山は、EPではマンダラ山(Mandara)であり、それをインドラが抑えつける<sup>5</sup>が、ここでは仏教の宇宙観で世界の中心に位置するメール山(Meru須弥山)になっており、ブラフマーが山を抑えつける。以

下に見るように、EPと比べると、このタンカの図ではブラフマーに重要な役割が与えられている。EPでマンダラ山を背に載せて支えた亀は、ここではイーシュヴァラ(=シヴァ)を背負っている。

### 3.2. 猛毒の発生

skyes bu skra ser\* mig nas me 'bar 'thon pa. [A11, C26]

\*D: ser po.

黄色い髪の方が眼から火を吹いて現われる。

lhas bsdigs pa. [A13, C30]

神が怯える。

lha 'gyel ba. [A13, C27]

神が倒れた。

lha ma yin gyis bsdigs pa\*. [A10, C28] \*C: 'gyel ba; D:

lhi sdigs pa.

アスラが怯える。

tshans pas hūm ring gis bsdigs pa. [A13, C29]; hūm. [A 欠, C31]

ブラフマーは長い「フーン」で叱責した。「フーン」

gzugs pra yas su zhig pa. [A10, C32]

体が溶解した。

gzugs de khyab 'jug gis mid pas dran med du bryal ba.

[A12, C33]

その物体をヴィシュヌが飲んで昏倒した。

lha dbang phyug. ri rab. [A12, C39]

イーシュヴァラ神。メール山。

slar dbang phyug gis drangs te mgrin pa sngon po. [A12, C34]

さらに、イーシュヴァラが呑み込んで、青い喉 [になった]。

### 考察

図の中心に位置する怪物(A本の中国語訳は「毒神」とする)のエピソードである。このように乳海攪拌で生じた猛毒を擬人化する例はEPの伝承には見られない<sup>6</sup>。また、それを退治する重要な役割がブラフマーに与えられているのもEPに見られない特徴である。いっぽうEPで主要な役割を果たすヴィシュヌは、ほとんど活躍していない。

この一節は、EPと異なる四部医典タンカの乳海攪拌神話の特徴がもっとも顕著に表われている箇所であるが、これとほぼ一致する話が、ヴァーグバタ(Vāgbhaṭa, 7世紀頃)の医学書『八科精髓集』(Aṣṭāṅgharḍdayasaṃhitā)<sup>7</sup>に見られる。

アムリタを求めて、神々とアスラたちが海を攪拌すると、アムリタができる前に、恐ろしい姿の男が生まれた。[彼は] 燃えたつ光、四本の牙、黄色い髪、火のような眼をもっている。世の人々は彼を見て落胆した

(viṣaṇṇa)。それで彼は「毒」(viṣa)と名付けられた。ブラフマーに「フン」と言われた(humkr̥ta=一喝された)彼から、植物と動物の形が[生じた]。彼はもとの姿形を棄てて、目を欺く性質のものとなったのである<sup>8</sup>。

四部医典タンカと同じく、猛毒が擬人化され、ブラフマーが怪物退治の役割を果たしている。

『八科精髓集』とその注釈書はチベット語に訳されており<sup>9</sup>、このエピソードが医学書とともにチベットに伝わった可能性が推測される。さらに、インドの医学書の中にこの話の典拠を求めると、『チャラカ本集』(Carakaśāhita)<sup>10</sup>の治療篇(Cikitsāsthāna)に次の挿話が見いだされる。

アマリタを求めて、神々とアスラたちが海を攪拌すると、アマリタができる前に、恐ろしい姿の男が生まれた。[彼は]燃えたつ光、四本の牙、黄色い髪、火のような眼をもっている。世の人々は彼を見て落胆した(viṣaṇṇa)。それで彼は「毒」(viṣa)と名付けられた。それ(毒)を、ブラフマーが動植物の母胎に結びつけた。それゆえ、水から生まれて火のようなそれ(毒)は2種類である<sup>11</sup>。

怪物の特徴、「毒」(viṣa)という語の通俗語源解釈、ブラフマーの働き、有毒の動植物の起源というすべての要素が『八科精髓集』と共通している。怪物の特徴のうち「四本の牙」はタンカのキャプションには記されていないが、怪物の絵には四本の牙が描かれている(Fig. 1 参照)。

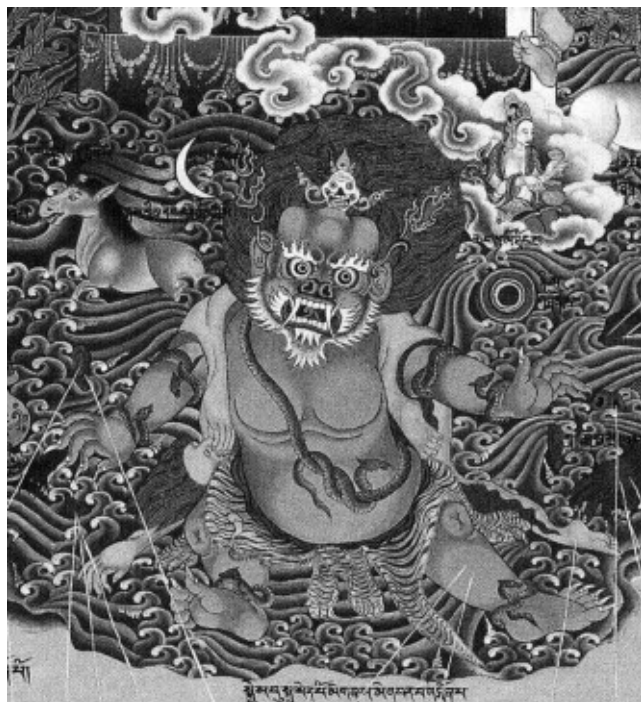


Fig. 1: Poison incarnate [Source: Baker and Shrestha (1997) 80]

なお、イーシュヴァラ(シヴァ)の手からこぼれた毒を有毒の動植物の起源とする記述はプラーナにも見られる<sup>12</sup>。

### 3.3. 宝物の出現

nyi ma 'thon pa. [A5, C11]

太陽が現れる。

zla ba 'thon pa. [A4, C12]

月が現れる。

dbang phyug gis zla ba cod pan byas pa. [A8, C13]

イーシュヴァラは月を頭飾りとした。

lha gnas\*. [A6, C3] \*C: gnas pa.

天界。

shing yongs 'du 'thon pa. [A4, C17]

如意樹が現れる。

yongs 'du lhas khyer ba. [A13, C18]

如意樹を神が持ち去った。

yongs 'du lhas spyi nor byas pa. [A9, C19]

如意樹を神が共有財産とした。

nor bu kos stu bhi 'thon pa. [A4, C21]

宝石カウストゥバが現れる。

lha mo dpal mo 'thon pa. [A4, C20]

女神ラクシュミーが現われる。

lha mo dpal mo dang nor bu kos stu bhi lha'i spyi nor byas pa. [A6, C21]

女神ラクシュミーと宝石カウストゥバは神の共有財産となった。

rta mgrin ring ngam thor thos. [A4, C14]

首の長い馬、あるいはウツチャイヒシュラヴァス。

glang po sa srung\* 'thon pa. [A5, C15] \*A: glang po

大地を守護する象が現れた。

rta dang glang po che sa srung thon pa brgya byin gyis bzhon pa byas pa. [A7, C16]

馬と大地を守護する象とが現れ、インドラが乗物にした。

chang lhas thob pa. [A5, C24] D: chang lha mo thong pa.

酒を神が得た。

chang gi lo rgyus. [A5, C23]

酒の来歴。

chang lhas 'thung ba. [A9, C25]

神は酒を飲んだ。

### 考察

Bedekar (1967) は、出現する種々の宝物の種類と出現の順序を比較して EP の伝承相互の関係を検討している<sup>13</sup>。この図では、出現の順序は明らかではないが、概ねプラーナの伝承に近いようである。ただし、多くのプラーナに共通する天女アプサラスと聖牛スラビを欠いている。

宝物の帰属では、EP でヴィシュヌに帰属する女神ラク



シュミーと宝石カウストゥバが神々の共有とされ、ヴィシュヌの優位が見られない。

四部医典タンカの他の図では Hayagrīva が rta mgrin と訳されており、C本とF本の英訳<sup>14</sup>は訳文に Hayagrīva を加えているが、この図には Hayagrīva ではなく馬が描かれている (Fig.1 参照) ので「首の長い馬」と解した。thor thos は EP の Ucchaiṣravas であろう。「大地を守護する象」はインド神話の diggaja で、EP ではインドラの乗る Airāvata である。

### 3.4. アムリタの争奪

bdud rtsi bum pa gang 'thon. [A17; C35]

壺一杯のアムリタが出現する。

khyab 'jug gis\* khyer te bros pa tshangs pas 'khor lo 'phangs ske bcad pa. [A18; C36] \*A: gi.

ヴィシュヌが持って逃げると、ブラフマーがチャクラを投げて頭を切った。

bdud rtsi sar lhung bas a ru ra\* byung ba. [A19; C37]

\*A, D: a ru.

アムリタが地面に落ちて、ミロバランが生じた。

bdud rtsi khrag dang 'dres pa sar lhung bas sgog pa byung ba. [A19; C38]

アムリタが血と混じったものが地面に落ちて、ニンニクが生じた。

### 考察

EP では、アムリタを奪い去ろうとしたラーフの頭をヴィシュヌが切り落とすが、ここではブラフマーがヴィシュヌの頭を切り落とすことになっている。やはりブラフマーが優位に立ち、ヴィシュヌはついに敵役と入れ替わっている。しかし、これにはさすがに無理がある。C本とF本の英訳<sup>15</sup>はEPに合わせて「ヴィシュヌがラーフの頭を切った」と訳文を修正しているが、画面でもチャクラを投げているのは明らかにブラフマーである (Fig.2 参照)。ただし、頭を切り落とされているのがヴィシュヌかどうかは判別しがたい。

ところで、ニンニクの起源についても『八科精髓集』に対応する記述がある。

アムリタを盗んだために切断されたラーフの喉から地上に落ちたアムリタの滴が、ニンニクになった<sup>16</sup>。

ここでは、EP の伝承と同じく、頭を切られたのはラーフである。前に見た箇所では『八科精髓集』の記述は、このタンカの記述に非常によく一致していた。もし両者が同じ伝承に基づいているとするならば、ここではチベットの伝承に錯誤があったのではないかと推測される。



Fig. 2: Brahmā [Source: Baker and Shrestha (1997) 80]

## 4. まとめ

チベットの医学タンカに描かれた乳海攪拌神話は、猛毒の擬人化やブラフマーの重視など、叙事詩・プラーナの伝承と異なる独自の要素を含んでいた。そして、これとよく似た伝承がインドの医学書の中にも見出された。従来、乳海攪拌神話の研究は、もっぱら叙事詩とプラーナの伝承によってなされてきたが、乳海攪拌神話は他にもさまざまなジャンルの文献に引用されており<sup>17</sup>、その中には本稿で見た例のように独自の内容を含む伝承が見出されるかもしれない。それらを視野に入れることで、また新たな解釈の可能性も出てくるのではなかろうか。

### 附：錬金術書の乳海攪拌神話

最後に、錬金術文献に引用された乳海攪拌神話を紹介しておく。錬金術 (rasāyana) は、医学の八部門のひとつにも数えられる。ここに紹介する『ラサラトナ・サムツチャヤ』(Rasaratnasamuccaya 29.1-9)<sup>18</sup>の乳海攪拌神話では、シヴァ神を語り手とし、猛毒の発生と青い喉の由来が語られている。内容は上に見た医書よりも EP の伝承に近い<sup>19</sup>。

女神よ、聞きたまえ。どこで猛毒が発生したか物語ろう。美神よ、その [猛毒の] 種別をそれぞれ詳しく [物語ろう]。神々とアスラと蛇、聖人、ガンダルヴァ、ヤクシャとラクシャサ、それにピシャーチャ、キンナラも集まって、見目麗しい女神よ、一方から [アスラの]

王バリが、また一方からブラフマーなどが、マンダラ山を攪拌棒にして、ナーガ王で巻いた。美しい神よ、そこで乳海攪拌が始まった。親愛なるものよ、そこでカーマデーヌなどの宝の流れが出現した。後にけがれ無き蓮の女神 [ラクシュミー] が生まれ、それからウッチャイヒシュラヴァスが [生まれた]。女神よ、巨大なアイラーヴァタが、そしてアマリタが出現した。女神よ、マンダラ山が壊れるほどの速さであまりに攪拌したので、女神よ、蛇の王の疲労から毒の炎が出現した。それから、きわめて恐ろしいその炎は、乳海に落ちた。そして、それ(炎)によって、そこ(乳海)に、猛毒カーラクータが生じた。世界を滅ぼす火のようで、怒れる毒蛇のごとく強烈であった。それを見て、すべての智慧ある [神々] と強力な悪魔たちとは、苦悩した顔をして、すぐさま私のところにやってきた。それから、彼らに求められて、私は最強の毒を飲んだのだ<sup>20</sup>。

- 1 乳海攪拌神話に言及する書物は枚挙に遑がないので、ここではこの神話を主題とする論考を二点だけ挙げるに留める。Long (1982) は、レヴィ=ストロースの神話素 (mytheme) の考え方を踏まえて、独自の視点からこの物語の構造を分析する。また、沖田 (2008b) は、世界の破壊と再生の神話ととらえ、北欧神話との比較を試みている。
- 2 四部医典タンカの成立については、Parfionovitch *et. al.* (1992) 5-12 参照。
- 3 叙事詩とプラーナのテキストごとの伝承の異同については、Bedekar (1967) が詳しい対照と考察を行っており有益である。
- 4 猛毒の発生とシヴァ神による救済の挿話は、多くの研究で定本として用いられている『マハーバーラタ』(Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona) と『ラーマヤナ』(Oriental Institute, Baroda) の校訂テキスト本文には含まれていないが、それぞれこの挿話を含む異本が挙げられている。諸プラーナは共通してこの挿話をもつ。Bedekar (1967) 参照。
- 5 上村 (2002) 146, 沖田 (2008a) 81, 沖田 (2008b) 100 は Mahābhārata 1.16.11 の abhyapīdayat を「削った」と訳すが、「(攪拌棒を固定するために) 抑えつけた」と解した。
- 6 Beer (2003) 231-233 の紹介する乳海攪拌神話の概要にはこのエピソードが含まれているが典拠不明。
- 7 Wujastyk (1998) 236-239 参照。
- 8 Yadunandana Upādhyāya, ed., *Aṣṭāṅghṛdayam of Vāgbhaṭa*, Varanasi 1982, 575: mathyamāne jalandhāv amṛtārthaṃ surāsuraiḥ / jātaḥ prāg amṛtotpatteḥ puruṣo ghoradarśanaḥ // dīptatejās caturdaṣṣtro harikeśo 'nalekṣaṇaḥ / jagad viṣaṇṇaṃ taṃ dṛṣṭvā tenāsau viṣasaṃjñītaḥ // huṃkṛto brahmaṇā mūrti tataḥ sthāvarajaṅgame / so 'dhyatiṣṭhan nijaṃ rūpam ujhitvā vañcanātmakam //6.35.1-3//

- 9 P No. 5798, se 297a6-297b1; D No. 4310, he 313b6-7; D No. 4311, e 390b1ff.; P No. 5799, he 434a3ff.; D No. 4312, go 253a4ff.; P No. 5800, kho 294b2ff.
- 10 Wujastyk (1998) 39-42 参照。
- 11 Jadavji Trikumji Acharya ed., *Caraka Saṃhitā of Agniveśa*, Chaukhambha Surbharati Prakashan, Varanasi 1994, 570-571: amṛtārthaṃ samudre tu mathyamāne surāsuraiḥ / jātaḥ prāg amṛtotpatteḥ puruṣo ghoradarśanaḥ // dīptatejās caturdaṣṣtro harikeśo 'nalekṣaṇaḥ / jagad viṣaṇṇaṃ taṃ dṛṣṭvā tenāsau viṣasaṃjñītaḥ // jaṅgamasthāvarāyāṃ tad yonau brahmā nyayojayat / tad ambusaṃbhavaṃ tasmād dvividhaṃ pāvakopamam //6.232.4-6//
- 12 Bhāgavata-purāṇa 8.7.47: praskannaṃ pibataḥ pāṇer yat kiñcij jagṛhuḥ sma tat / vṛścikāhiviṣauśadhyo dandaśūkās ca ye 'pare // 「飲んでいるとき手からこぼれた、いくばくかのそれ(ハーラーハラ)を、蠍と蛇と毒草と、その他の嘔むものたちとが取りこんだ。」
- 13 Bedekar (1967) 44-47.
- 14 Parfionovitch *et. al.* (1992) 273; Williamson and Young (2009) 146.
- 15 Parfionovitch *et. al.* (1992) 273; Williamson and Young (2009) 146.
- 16 Yadunandana Upādhyāya, ed., *Aṣṭāṅghṛdayam of Vāgbhaṭa*, Varanasi 1982, 602: rāhor amṛtacauryeṇa lūnād ye patitā galāt / amṛtasya kaṇā bhūmau te rasonatvam āgatāḥ //6.39.111// 同様の記述がパウアー写本中の医書にもある。A. F. Rudolf Hoernle, ed., *The Bower Manuscript: Facsimile Leaves, Nagari Transcript, Romanised Transliteration, and English Translation with Notes*, vol. 1, Calcutta 1893-1912; rep. New Delhi 1987, 1-2: purāmṛtaṃ pramathitam asurendraḥ svayaṃ papau / tasya ciccheda bhagavān uttamāṅgaṃ janārdanaḥ // kaṇṭhanāḍī samāsannā vicchinne tasya mūrdhani / vindavaḥ patitā bhūmāv ādyaṃ tasyeha janma tu //10-11// 「昔、攪拌によって得られたアマリタをアスラの長が自ら飲んでいるとき、聖なるジャーナルダナ(ヴィシュヌ)が彼の頭部を切った。彼の頭が切断されたとき、喉の血管に達した滴が大地に落ちて、はじめてこの世にそれ(ニンニク)が生じた。」 Cf. Wujastyk (1998) 201; Lochan (2003), 129-130; 144.
- 17 Beer (2003) は「乳海攪拌の伝説が初期のインド仏教に取り込まれ、後にサンスクリット語から忠実にチベット語に訳された」(p. 231) とするが、具体的な例は指摘されていない。大蔵経中には、恵沼の『成唯識論了義燈』に「如吠陀論云、我已飲甘露、成就不復死我已入火光、願諸天知識、謂鑽乳海以爲甘露、飲之則得不死」(T 43, 664c15-17) という記述が、圓測の『仁王經疏』に「四天王共修羅鑽乳海、得爲甘露」(T 33, 364c24) という記述があり、乳海攪拌神話が東アジアにまで伝わっていることが分かる。
- 18 Wujastyk (1998) 15-16 参照。

- <sup>19</sup> 他にも White (1996), 192-193 には、硫黄の起源を乳海攪拌に求める記述が紹介されている。錬金術文献における乳海攪拌神話については、改めて検討する必要があるように思われる。
- <sup>20</sup> Kapil Deo Giri, ed., *Rasaratnasamuccaya*, Chaukhambha Sanskrit Series, 2nd. ed. Varanasi, 2000, 385: śṛṇu devi prabakṣyāmi yatrotpannaṃ mahāviṣam / bhedāṃs tasya varārohe yatra yatra savistaram // devadaityoragāḥ siddhā gandharvā yakṣarākṣasāḥ / piśācāḥ kinnarās caiva militvā ca varānane // ekato balirājaś ca brahmādyāś ca tathaikataḥ / manthānaṃ mandaraṃ kṛtvā nāgarājena veṣṭitam // kṣīrābhdhimathanaṃ tatra prārabdhaṃ surasundari / nirgatās tatra ratnaughāḥ kāmādhenvādayaḥ priye // amalā kamalotpannā paścād uccaiḥśravās tataḥ / airāvato mahākāyo nirgataṃ devi cāmṛtam // atīva manthanād devi mandarāghā-tavegataḥ / ahirājaśramād devi viṣajvālā vinirgatā // tato 'tighorā sā jvālā nimagnā kṣīrasāgare / tayā tatraiva cotpannaṃ kālakūṭaṃ mahāviṣam // pralayānalasaṃkāśaṃ kruddhaḥ kāla ivotkaṭaḥ / taṃ dṛṣṭvā vibudhāḥ sarve dānavās ca mahābalāḥ // viṣaṇ-ṇavadanāḥ sadyaḥ prāptās caiva madamṭikam / tatas taiḥ prārthyamāno 'ham apibaṃ viṣam uttamam //29.1 -9//

## 文 献

### 四部医典タンカ資料

- (A) 王 and Byams pa 'phin las (1986). テキストと中国語訳を含む。ただし直訳されていないものが多い。
- (B) 王鐳・ビチ・ツァンパシレー 訳編，四部医典タンカ全集（池上正治訳），平河出版社 1992. A の和訳，テキストと和訳（A の中国語訳からの重訳）を含む。
- (C) Parfionovitch *et. al.* (1992). テキストと英訳を含む。書評: Paul Nietupski, *Journal of the American Oriental Society*, 15, 2009, 651-653.
- (D) Baker and Shrestha (1997). テキスト・訳なし。画面の文字が読める。
- (E) 池上正治解説，チベット医学聖典 四部医典タンカ，富山県国際健康プラザ国際伝統医学センター 2002. 同センター所蔵の四部医典タンカの写真と解説を収録したブックレット。テキスト・訳なし。画面の文字も小さく判読できない。
- (F) Williamson and Young (2009). D の図版にテキストの英訳を付す。
- (G) Dharmapala Thangka Centre のタンカ・データベース

スに収録された四部医典タンカ。C のタンカの模写。英訳（C の英訳文に一部手を加えたもの）とドイツ語訳（訳者名なし）を含む（<http://www2.bremen.de/info/nepal/Table1Htm>）。

### 略号

- P: 北京版チベット大蔵経。  
D: デルゲ版チベット大蔵経。  
T: 大正新脩大蔵経。

### 参考文献

- Baker, Ian and Romio Shrestha (1997): *The Tibetan Art of Healing*, Chronicle Books, San Francisco. 192 p.
- Bedekar, V. M. (1967): The Legend of the Churning of the Ocean in the Epics and the Purāṇas: A Comparative Study. *Purāṇa*, 9.1, 7-61.
- Beer, Robert (2003): *The Handbook of Tibetan Buddhist Symbols*, Shambhala, Boston. 256 p.
- Lochan, Kanjiv (2003): *Medicines of Early India*, Chaukhambha Sanskrit Bhawan, Varanasi. 188 p.
- Long, J. Bruce (1982): Life out of Death: A Structural Analysis of the Myth of the 'Churning of the Ocean of Milk' in *Hinduism: New Essays in the History of Religions*, ed. by B. L. Smith, E. J. Brill, Leiden, 171-207.
- Parfionovitch, Yuri, Gyurme Dorje, Fernand Meyer eds. (1992): *Tibetan Medical Paintings: illustrations to the blue beryl treatise of Sangye Gyamtso (1653-1705)*, H. N. Abrams, Inc. New York. 2 vols. ix, 336 p.
- White, David Gordon (1996): *The Alchemical Body*, University of Chicago Press, Chicago. xviii, 596 p.
- Williamson, Laila and Serinity Young (2009): *Body & Spirit: Tibetan Medical Paintings*. University of Washington Press, New York. 234 p.
- Wujastyk, Dominik (1998): *The Roots of Ayurveda*. Penguin Books India, New Delhi. 416 p.
- 王鐳, Byams pa 'phin las (強巴赤列) ed., trans. (1986): *Bod lugs gso rig rgyud bzi'i nang don bris cha do mtshar mthod ba don ldan* (四部医典系列挂図全集), 西藏人民出版社, Lhasa. 499 p.
- 沖田瑞穂 (2008a): マハーバーラタの神話学, 弘文堂, 東京. 256 p.
- 沖田瑞穂 (2008b): 乳海攪拌神話とラグナロク. 明星大学研究紀要 (日本文化学部・言語文化学科) 16, 99-108.
- 上村勝彦 (2002): 原典訳マハーバーラタ I, 筑摩書房, 東京. 453 p.

要 旨

乳海攪拌神話は、古典的なインド神話のうちでもっともよく知られた挿話のひとつである。この物語は、チベットの医学絵画にも、毒物の起源の説明として現われている。このチベット版は、叙事詩・プラーナ文献とはやや異なる、独特の挿話を含んでいる。そして、このような挿話と類似した記述が、インドの医学書に見いだされるのである。これらの異本を比較することによって、周知の叙事詩・プラーナ文献の伝承とは異なる、もうひとつの伝承を見いだすことができるであろう。